信濃毎日新聞
SHINANOMAINICHI SHIMBUN
（長野）
'25.8.16

戦争や抑留体験に耳傾ける

長野で集い、高校生の朗読も

北信地方の有志らでつくる「自分史を綴り語り継ぐ会」は15日、「玉音放送と戦争体験を聞く集い」を長野市新田町のもんぜんぷら座で開いた。戦中・戦後の食事や学校生活の苦労、旧満州からの引き揚げの苦難などの体験を市内の80代3人が証言し、シベリア抑留などの体験記を市内から参加した高校生5人が朗読した。来場した約50人は静かに耳を傾け、戦争の悲惨さと命の大切さに思いを寄せた。

シベリア抑留など戦争体験者の手記を朗読する高校生

満州に暮らした岡田雅子さん(87)は7歳の時、ソ連による侵攻を受けて穏やかな日々が一転。ソ連軍の兵士が突然自宅に侵入し、銃を向けられた恐怖を語った。母親やきょうだいと避難民となり、列車と徒歩で港へ。日本への引き揚げ船では、悪天候の時はひどい船酔いになったといい「生き地獄。本当に苦しかった」と振り返った。

広域通信制の第一学院高校3年の中野杏寿紗(あずさ)さんは、満蒙開拓団員として満州に渡り、戦後シベリアに抑留された長野市の坂田雪男さん（故人）の手記を朗読。凍った抑留者の遺体を火で温めてひつぎに納め埋葬したことなどを伝えた。中野さんは朗読後、「残酷な事実と寒気を感じるほどの悲痛さがあった。戦争を体験していない自分にとって人生の深みになるように感じた」と話した。